



さんかくつうしん

News Letter Vol.9

男女共同参画推進室

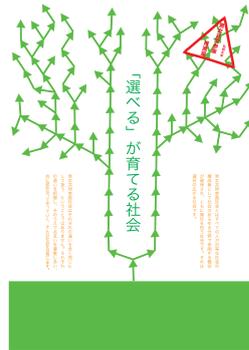
「新実施体制について新体制でスタート！」

男女共同参画推進室は平成25年度より新しい体制になりました。

研究推進部社会連携課が担当部局となり、室員には、従来からの学部・研究科と附属病院に加え、総務課・人事課・財務部の職員3名が新たに加わりました。さらに、9月からは特任教員が赴任しました。

また、業務内容を3つに分類し、ワークライフバランス部会、研究支援部会、連携・啓発・広報部会を編成しました。全ての室員は、いずれかの部会に所属し、役割を担っています。

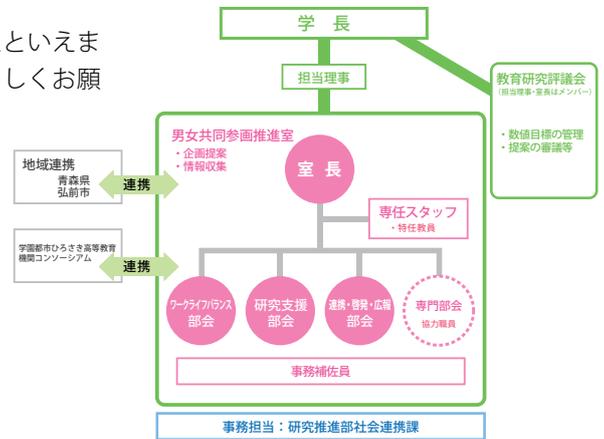
これらにより、本学の男女共同参画の推進のための体制がより充実したといえます。私ども男女共同参画推進室室員やスタッフを、これからどうぞよろしくようお願い申し上げます。



男女共同参画推進室長
日景 弥生 氏



弘前大学男女共同参画推進室 推進体制図



男女共同参画推進室

平成25年度の事業計画

講演活動として三重大学の鈴山雅子先生をお招きし、「地域連携による男女共同参画の推進」という演題で三重県における男女共同参画の事例をご紹介頂くほか、北東北3大学連携による男女共同参画合同シンポジウムに参加します。

今年度は「女性研究者フォーラム」を「さんかくカフェ」に改称しました。従来よりも幅広い方を対象とした勉強会を展開するとともに、「さんかく通信」を発行することで啓蒙活動に努めます。

また、前年度に好評であった「研究支援員制度」や「学会託児支援事業」を継続する予定です。

Consortium

学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム 第6回講演会

テーマ：地域連携による男女共同参画の推進

～三重県内を中心とした事例紹介～



講師：鈴山 雅子氏
(三重大学学長アドバイザー)

日時：平成25年9月17日(火)
 13時～14時 講演会
 14時～15時 さんかくカフェ

場所：弘前大学創立60周年記念会館
 コラボ弘大 八甲田ホール(8階)

申込み不要・参加費無料

「つがるネッサンス！」の女性研究者たち vol.6

「育児中」が研究者としてのスタートでした

研究者としてのきっかけは「長女の育児」でした。

私 は弘前大学医学部医学科を平成19年3月に卒業して、現在医師としては7年目になります。その間、長女を出産し現在第二子を妊娠中です。産科婦人科学講座に所属し現在臨床と研究の業務に追われる毎日を送っています。

私がなぜ研究の仕事に従事するようになったのか、そのきっかけは長女の育児休暇中に暇を持て余して何か、デスクワークができないかとデータ処理を始めたことが第一歩だったように思えます。当初はそこまで研究の仕事に力を入れるつもりはありませんでしたが、上司である水沼先生が大変研究に熱心な方で、指導されるうちに自分も楽しみややりがいを感じるようになっていくことに気づきました。しかし、産婦人科の臨床と研究と育児を両立することは決して簡単ではなく、どこまで自分が今のスタイルを続けられるのかが自信がないのが正直なところでした。



幸い、私の家庭環境は仕事に対して恵まれた状況にあり、サポートしてくれる家族がいてこそ、今の自分があることを日々実感しています。

弘前大学大学院医学研究科
産科婦人科学講座 助教

飯野 香理
Kaori IINO



「近々出産」「週末の宴会」が我が家の楽しみです！

私 の家族は医師である夫と義母と長女の4人家族で、この秋に家族が増えて5人になる予定です。

夫も医師であるため、お互い学会や日当直で週末不在になることが多くなかなか家族全員が集まるのが難しい状況です。そこで、家族で暗黙に決めていることがあります。それは、金、土、日のいずれか1日に自宅で「宴会」を開くことです。

宴会といっても少し手の込んだ料理を用意して少しおいしいお酒を飲む程度ですが、大人3人はお酒が大好きで時にワイン1本を空けてしまいます。今は残念ながら私がお酒を飲めないのあまり宴会も盛り上がりませんが、出産後にはまたみんなで飲もうねといつも話しています。

秋にもう一人家族が増えると益々忙しい日々になるとは思いますが、環境が許す限り今後も研究に従事していきたいと考えています。

第6回理工学部女子会

しなやかな知性の習得、物理科学科



平成23年11月14日に理工学研究科で「女子学生座談会」が開催されました。当日は物理科学科3年(当時)の女子学生が集まってもらいました。

参加してもらった女子学生達は、興味を持っていることを学術的に解明するために物理科学科に進学したそうです。大学で勉強するうちに、物理がもっと好きになった女子学生もいました。ただ、高校の物理とは全然違うので戸惑ったこともあるし、目に見えない物を扱うので理解するのが難しいとのことでした。

“物理”の学科を選択する人は個性的な人が多いので、一緒にいて飽きないと今の環境を楽しんでいました。物理科学科の某教員から「学科の女子学生はパワフルで将来が楽しみだよ」とのお墨付きを得ていますので、将来活躍すること間違いなしです。(理工学研究科 藤寄 里美)

大学生活 弘前大学理工学部 理工学部女子会 将来の夢
★ 気になる!! 理工学部女子会はついにアクセス★
<http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/mirai/list.html>

楢橋先生追悼

ROAD TO A SUCCESSFUL SCIENTIST

2011年6月、本学主催のセミナーで講演をしてくださったノースウエスタン大学(シカゴ)教授、楢橋敏夫先生が4月21日ご逝去されました(享年86歳)。

2年前に本学にいらっしゃった時はお元気で、一日に2回(文京と本町)のご講演をお願いしましたが、嫌な顔も疲れた顔も一切せず(日本語でのセミナーはちょっと大変とは洩らされていましたが)引き受けてくださいました。昨年夏に癌を発症し、化学療法を続けながらお仕事もこなされ、亡くなる前日までオフィスで仕事をされていたそうです。セミナーに参加された方はご覧になったかと思いますが、楢橋先生が講演の最後に示された"ROAD TO A SUCCESSFUL SCIENTIST"と題した項目は世界的神経科学者からのメッセージであり、研究者のみならず仕事をしていくうえで大切な項目があるかと思っています。ここに改めて掲載しますと共に謹んで楢橋敏夫先生のご冥福をお祈りいたします。



ROAD TO A SUCCESSFUL SCIENTIST

Rise to the challenge
Don't be afraid of taking a risk
Develop global visions, not just analytical skills
Be a pacemaker, not a follower
Find a niche, not just a popular trend
Develop skills for time managements
Develop communication skills: oral and written
Develop intuition to grab at an opportunity
Publish or perish: both quality and quantity
Be an extrovert, not an introvert
Don't be a perfectionist

Toshio Narahashi

新看護部長さんに聞きました。

男性看護師へ期待すること

弘前大学医学部附属病院 看護部長
小林 朱実 氏



10数年前、日本のマグネットホスピタルと言われる病院の看護管理者の「男性看護師が増えると組織が変わるよ」という一言が男性看護師の採用を推進する牽引力になったことを覚えています。当時3名(看護職員全体の0.8%)だった男性看護師は、現在38名(全体の6%)が各分野で活躍しています。

現場の感想は、①力仕事・不穏や威圧的な状況の患者への対応、②緩衝材的役割、③男性の視点・論理的思考等に魅力を感じているようです。とても頼もしく、なくてはならない存在になっています。患者さんからの信頼も厚く、担当を希望される方がいる一方で、ケアを敬遠する方もおります。業務上の不都合も若干存在していますが、互いに気配り・気遣いをしながら業務調整をしています。今後男性看護師が増えることで、徐々に改善されるのではと期待しています。



職業に関係なく、女性または男性にしかできないこと・得意なことがあり、また、性差というよりも個人の特性が大きいと感じています。あえて違いを探すなら、出産等で就業中断

が少ないことは、強みになると思います。最近と一緒に育児休暇をとることもありますが、女性より継続的・均質的な就業継続が可能であり、労働力の確保のみならず、知識・技術が蓄積され、専門性の向上が期待できます。患者さんの回復を促進するような手助けができる、そんな看護師へ成長してくれることを願っています。また、求められている役割を認識し、組織をよい方向へ牽引してくれることを期待しています。

「男らしさ」「男くささ」「男ならでは」「男のくせに」「男なのに」などあげると切りがなく、「女」も同様です。男女がいることで、そんな期待について“いいふりこいて”頑張っただけで応えるそんな相乗効果もあると思います。お互いのよさを理解・補てんしあい、男女共同で、質の高い看護を創造・発展させ、社会の期待、超高齢社会での役割に役立てていけることを願っています。また、管理者としてそのような組織づくりを目指したいと考えています。

ワーク・ライフ・バランス・インタビュー

ご夫婦で本学事務に勤務している男性管理職に、仕事と家庭、子育ての経験や若い人たちへの助言等について聞きました。

仕事と子育ての両立は「お互い様！」



■ 齋藤 伸雄 さん
医学研究科事務長

小学生から中学生まで3人の男の子がいますが、二男と三男は小さいときから食物アレルギーがひどく、食事や入浴後の皮膚の手当て、定期受診など夫婦で協力しないとやっていけない事情がありました。また同居の祖父母が保育園のお迎えや子どもの世話を手伝ってくれました。夫婦でできないことは祖父母の手を借りれば何とかかなるものです。

皆働きすぎと言えそうかもしれない。仕事が忙しく母子家庭のようにしている同僚も多いと聞きます。我々夫婦は帰宅時間を調整しています。特に妻はいつも7時から勤務し早く帰宅しています。家事は結婚してからやるようになりました。妻が食事の準備をし、私が後始末と洗濯を自然に分担するようになりました。

子育てと仕事の両立は、家庭内はもとよりみんなと助け合うことではないかなあ。これから子育てされる方は、職場に迷惑をかけることがあっても、それは巡り巡って子育てをしている同僚を助ければいいし、「助け合うもの」、「お互い様」だという気持ちを持ってもらいたいと思います。

第1回「さんかくカフェ」開催しました！

8月7日に医学研究科にて第1回「さんかくカフェ」を実施しました。

これはお茶を飲みながら気さくに参画や両立の悩みを語りあうというものです。今回のテーマは研究支援員制度。

参加者は19名で、学部や立場を超え、今後の両立支援の充実にむけた有意義な語り合いになりました。特に制度利用経験者のお話は刺激的で、参加者からはそうした「生の声」や「異分野」の状況を知ることができ大変良かった等の前向きな感想を頂きました。



平成24年度 病児保育に関するニーズ調査報告

男女共同参画推進室では、「性別、年齢、国籍を問わず、ワーク・ライフ・バランスに配慮しながら誰でも学びやすく働きやすい環境づくり」を目指すために、本学教職員を対象に「病児保育」についてアンケート調査を実施しました。その結果の一部をご紹介します。

病児保育は必要

とても必要である 627人(48.6%)、まあ必要である 485人(37.7%)であり、8割以上が必要であると考えていた。

病児保育の半数は1回2,000円

1回2,000円が675人(52.3%)、2時間未満1,000円(2時間以上1時間毎500円加算)315人(24.4%)が多かった。

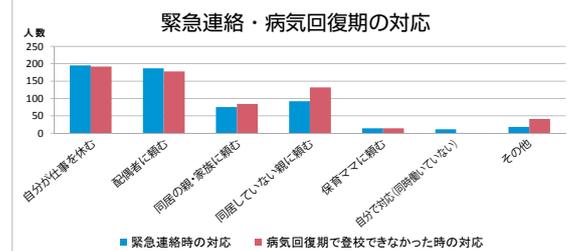
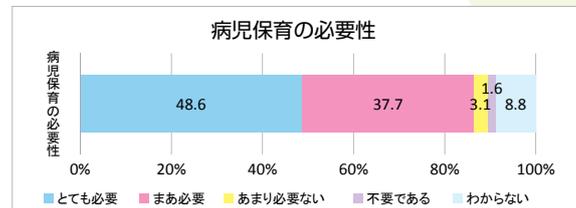
緊急連絡を受けた半数は自分か配偶者が対応

子どもがいる389人で緊急連絡を受けた人は306人(75.2%)であった。

その対応は 自分が仕事を休む 195人
 配偶者に頼む 187人
 同居していない親に頼む 92人
 同居の親・家族に頼む 75人【複数回答】

病児保育利用の希望は約7割

利用したい人は867人(67.2%)であった。



病児保育の設置場所は本町地区が多かった

本町地区 980人(76.0%)、文京地区 291人(22.6%)
 学園町地区 86人(6.7%)であった。

対象の属性 対象2,498人、回収数1,290部、回収率51.5%

【性別・年齢】 男性 496人(38.4%)、女性 793人(61.5%)

30歳未満 247人(19.1%)、30～39歳 422人(32.7%)、40～49歳 321人(24.9%)
 50～59歳 241人(18.7%)、60歳以上 56人(4.3%)、無回答 3人(0.2%)

【所属】 事務局 183人(14.2%)、人文学部 24人(1.9%)、教育学部 101人(7.8%)
 医学研究科 162人(12.6%)、保健学研究科 43人(3.3%)、医学部附属病院 641人(49.7%)
 理工学研究科 50人(3.9%)、農業生命科学部 6人(0.5%)、その他 79人(6.1%)
 無回答 1人(0.1%)

【従業上の地位別】

大学教員 285人(22.1%)、附属学校教員 66人(5.1%)、正職員 631人(48.9%)、契約職員 79人(6.1%)
 パートタイム 213人(16.5%)、その他 15人(1.2%)、無回答 1人(0.1%)

【子どもの有無】

子どもがいる 407人(31.6%)で、
 子どもの年齢は、保育園・幼稚園児 228人(17.7%)、小学生(低学年) 109人(8.4%)
 小学生(高学年) 110人(7.7%)、中学生 98人(6.7%)【複数回答】